のどかな日差しが降り注ぐ昼下がり。私は自分の使い魔を空き箱を片手に問い詰めていた。

「ちょっと！棚に置いてあったクッキー、勝手に食べたでしょ！大事にとっておいたのに……」

彼はしまったと言わんばかりに一瞬だけ気まずそうな顔をする。
けれど、それもほんの束の間のこと。すぐにツン、とそっぽを向く。

「ふん。別にいいじゃないか。また買ってくれば」

ご主人様のお菓子を勝手に食べておいてこの態度である。主人の私物に勝手に手を出した従者とは、とても思えない。

まったく、なんて使い魔だ。

「一言言ってくれれば、お菓子くらい分けてもいいのに……。まったく、どうして無断でダメな部屋に入っちゃうかな……」

思わず溜息がこぼれる。

一応、彼の首に嵌めた首輪を介して、命令魔法で『部屋

に勝手に入るな』と命じることはできる。そうすれば、本人がどれほど反抗しようと、彼の身体は主人である私の言葉に逆らえなくなるだろう。

けれど、長期間効果が持続するような命令は魔力消費も馬鹿にならない。いくら私が魔法チートを持つ転生魔女といえど、魔力は無限ではないのだから。

何より長時間に及ぶ拘束魔法は、彼自身への負担も大きい。だからこそ私は、なるべく短期間で解除されるような命令しか使わないようにしていた。

出来ることなら、命令魔法など使いたくない。

けれど、どうやら彼は、ごろつきだった頃の手癖の悪さがまだ抜けきっていないらしい。危険だから入ってはいけない、と何度も言い聞かせている部屋にまで、こっそり忍び込んでいるようだった。

今回は、お菓子のつまみ食いだけで済んだからいい。が、立ち入り禁止の部屋には、毒薬や呪具、私でもよくわからん魔道具が保管されているのだ。

「私は別に、お菓子を勝手に食べるなとは……いや、これもダメだけど。それよりも、鍵のかかった部屋にわざわざ鍵開けして入っちゃダメって言ってるの。危ない

魔道具があるんだから。発動しちゃうかもしれないでしょ？」

「ふんっ、俺がそんなヘマする訳ないだろ」

「……出会った頃は、簡単な罠魔法に引っかかってたくせに」

そう、この生意気な男、私の屋敷に無断侵入し、無様にも罠魔法に引っかかったことがある。それがきっかけでなんやかんやあり、今では使い魔となっているのだ。

「なっ……！あ、あれは偶々だ！」

「偶々、ねえ……まったく、口で言っても分からないようね。仕方ないなあ」

私は小さく息を吐く。そして、拘束魔法の詠唱を口にした。その瞬間、私の手元から生まれた魔力の鎖が、彼の首元へと伸びる。

「ちょっ……!なんだよ、この鎖、うぐっ……！」

彼が抗議するより早く、私は手の中の鎖をぐい、と引いた。
首輪から鎖を伸ばして引かれる姿は、まるでリードに繋

がれた犬だ。

「お、おい！いきなり引っ張って何するんだよ。離せ、この……っ」

悪態をつきながら踏ん張ろうとするものの、拘束魔法で繋がった鎖に逆らえるはずもない。
抵抗する隙もなく引っ張られ、首元にかかる力に彼は苦しそうに顔を歪める。

普段の説教とは違うことに、ようやくそのことに気づいたのか、彼の顔には苛立ちに混じって、わずかな戸惑いが浮かんでいた。

私はそのまま彼を寝室まで連れていく。
お仕置きと言ったら、アレしかない。

私は彼の身体をぽい、とベッドの上へ放り投げた。

「うわっ……！」

ぼすん、と寝具が沈む。
起き上がろうとする彼を尻目に、持っていた鎖の端をベッドフレームへくくりつけた。
これで、彼の意思だけではベッドから離れることは難しい。

「ど、どうするつもりだ」

鎖でつながれたまま、警戒するようにこちらを睨む彼に、私は淡々と告げた。

「勝手に部屋に入っちゃだめって、身体に教え込むわ」

「は……？」

ベッドフレームから伸びた鎖が、彼が身じろぎするたびにジャラリと音を立てる。
不自由な姿勢のまま、それでも強気にこちらを睨みつける彼。
その視線に構わず、私は声に魔力を込めて命令した。

「下、全部脱いで。四つん這いになりなさい」

「な……っ。どうしてそんなこと――っ、ぐ！」

反射的に命令へ逆らおうとした瞬間、首輪に刻まれた魔法が作動する。きゅ、と首輪が締まり、彼の言葉が途切れた。

「……クソったれ」

悔しそうに吐き捨てる彼。
それでも命令には逆らえず、ぎこちなく身体を動かし、ベッドに繋がれた不自由な姿勢のまま、下履きを脱いでいく。

やがて、私の使い魔になってから随分と肉付きのよくなった彼の臀部が露わになった。

「なんでこんなこと……」

ブツブツと毒づきながら、彼は命じられた通り、ベッドの上で四つん這いになる。

強がってはいるものの、ただならぬ怒気を感じ取ったのだろうか。突き出した尻を守るかのように、尻尾はくるんと丸まっていた。

内心、怯えているだろう彼の様子に、心を痛めながらも、ここで躾の手を緩めては彼のためにならない。心の中で自分に喝を入れる。

わざと乱暴な手つきで、丸まってる尻尾を鷲掴み、もう片方の手で露わになった尻を思い切り引っ叩いた。

「ぎゃんっ！」

平手の乾いた音、鎖の揺れる音、そして彼のうめき声が部屋に響く。

ベッドシーツを握りしめて痛みを堪える彼。

「痛いじゃないか..... このっ！」

彼の臀部が真っ赤に染まる。

「言っても分からない獣には体罰が必要でしょ」

「け、獣って..... ひ、ひぃっ！」

続けて、2度、3度と尻を打つ。真っ赤な手形がどんどんかさなり、見る見るうちに彼の尻を紅く染め上げていった。
マットレスに顔を押し付けるせいか、うめき声はときどきくぐもって聞こえた。

「ぐっ、がぁっ.....！なに、するんだよ、ちょっと、食いもん、漁っただけじゃないか、この変態！」

どうやら反省する気はないようだ。

いつも言われ慣れている「変態」という罵倒にぴきんとしてしまう。……なら、お望み通りよりマニアチックな

お仕置きをしてやろうじゃないの。

「変態って……まったく、反省していないようね」

私は自分の服を取り払う。そこに鎮座していているのはいわゆる男性器。そう、この世界には第三の性別としてふたなりが存在するのだ。

外気に晒された熱棒は目の前の獲物を犯しつくそうと、すぐさま勃ち上がる。

空間転移魔術を使ってスライムローションを手元に取り寄せた。

「なにす、や、やだ、それだけは、ああっ♡」

ぐじゅ、ぬちゅ♡ぐちゅちゅ……♡

卑猥な水音を立てながら、スライムローションは彼の後孔を性器に作り変えていく。

「やだ、やめ、ろ♡ケツ、いたいのに♡そん、な、こと♡され、たら、ぁあ、っん♡」

彼のお尻は散々平手打ちされて真っ赤になっている。
しかし、毎夜毎夜暴かれた菊門は凌辱されるのを待ちわ

びるようにヒクついていた。

本来なら、もう少し丹念にほぐすところだが、これはお仕置きである。挿入するのに最低限必要な慣らしをした後、私はすぐさま怒張で貫いた。

「がぁっ、あ、ぐっ、こ、このやろ……っ♡ふっ、うぅ♡」

彼の喉から色の混じったうめき声が漏れる。
連日のように蹂躙されている彼の後孔は、最低限の慣らしにもかかわらず、肉槍をゆっくりと咥え込んでいく。

「お尻、いた、いの、に、掴むな♡あ、んんっ♡奥♡やめ、あっ♡い、嫌♡やだ、そこばっか♡……っ、ぎゃん！い、痛い、ハメ、ながら♡叩くなぁっ♡」

赤く腫れた尻を躊躇なく鷲掴み、荒々しく腰を打ちつける。犯しながらも時折尻を引っ叩いてやると、彼の後孔はきゅう♡っと媚びるように締めつけてきた。

彼の耳はすっかり、ペタンと伏せられている。怯えのあまり丸まった尻尾が股の間に収まろうとするが、すでにその場所は私の怒張によって嬲られている最中だ。行き場のない尻尾がパサパサと彷徨い、私の下半身がますます刺激される。

「ふーっ、ふーっ♡やめ、やだ、こんな、オナホ、みたいに♡おれのからだ、つかい、やがって……〜〜〜っ♡っ、ぁああっ♡」

「その割にはココは反応してるみたいだけど」

私は覆いかぶさり、彼の前半身の下の方——陰茎に手を伸ばす。
彼の陰茎はピョコンと勃ちあがり、抽挿のリズムに合わせて揺れていた。先端からはダラダラとした我慢汁が垂れ、乱雑な挿入に感じているのは一目瞭然だった。

「う、嘘だ♡こんな、乱暴なセックス♡感じるわけ、ないだろ♡全然、よくなんてないんだからな」

「ま、これはお仕置きだから、気持ち良かったら困るわ」

すっかり四つん這いの姿勢が崩れている彼。かろうじて、腰を突き出すだけになっている。

私は彼の陰茎から手を離す。ぐったりしている彼に構わず、ベッドシーツと彼の身体の間に両手を差し入れ、彼の両胸をまさぐる。

「ひ、あ、なにす、ひうっ♡」

私の両手はすぐさまお目当てのもの――彼の胸でまあるく色づく双芽を探りあてた。
指先でつまみ、ぎゅうっ♡と抓りあげると彼の身体が反射的にビクビクと震える。

「も、それ、いじょ、きゃうっ♡奥、やめ、あんっ♡」

彼のナカが蠢く。偶然、彼のイイところを擦りあげたのか、彼は一際甲高い声をあげる。
涙目になっているのは、果たして痛いだけが原因だろうか。

彼のナカがぎゅうぎゅう♡と痙攣を繰り返す。そろそろ射精しそうなサインだ。

これがただの情事なら、気の済むまでイイところを刺激して、射精に追い込むところだ。

しかし、これはお仕置きだ。彼が二度と、無断で部屋に入らないようにするための。彼の身体に主従関係を教えるための行為なのだ。

私は今にも吐露してしまいそうな彼の陰茎の根元をギュッと握り、射精を阻害する。

「おれの、ちんこ、掴むなぁっ♡しゃせぇ、できな、だろ♡」

射精するタイミングを取り上げられ、彼は抵抗する。後ろを貫かれ、前を握られながらも、身じろいで、どうにか射精の快感を得ようと必死だ。

「ふーん、射精したいんだ？お尻叩かれて、乱暴にされてイッちゃいたいんだ？」

「なっ、ちが、そんなんじゃ……っあ、ん♡」

あえて彼の自尊心を傷つける言葉を選ぶ。

ここで達してしまえば、自分は乱暴に犯されて悦んでしまう変態と見られてしまうと考えたのだろう。どうにか私の手から抜け出して、射精をしてやろうと、身を捩っていた彼の抵抗がピタリと止まる。

私はあえて彼の射精を拒んでいた手を離した。

そして、彼の尻を叩きながら、ごちゅごちゅ♡と前立腺の裏側を擦ってやる。
私の動きが変わったことに気がついたのか、彼は再度抵抗をする。

「や、やだ、やめろ、イきたくない♡イかせるな、ばか♡あ、ああっ♡」

しかし、抵抗も虚しく、ぴゅうっ♡と彼の先端から白濁液がこぼれ出た。トロトロと溢れる精液はシーツと彼の太ももを濡らしていく。

「う、嘘だ……こんなので、イく、なんて……♡」

さすがに尻を叩かれながら犯されてイくとは思わなかったのか。青ざめた顔で、自分が汚したシーツを見つめる彼。

「あーあ、お尻ペンペンされて、乱暴にされてイッちゃったね」

「う、うるさい、お前が、いきなりっ、激しくする、から、あっ♡」

「反省してないならもう1回かな?そろそろ私も出したくなっちゃったし」

「きゃうっ♡わかった、反省したから、もう、これ以上、は、やめてくれ、ちんぽ、抜いて、くれ、これ、いじょ、やめ、俺の、ちんこ、おか、しくなる、から、っ♡」

吊り上げた瞳に涙を滲ませながら、謝罪する彼。嗚咽交じりの喘ぎ声と粘り気のある水音が部屋に響く。

「だーめ、何度言葉で注意してもやめなかったんだもの。ちゃんと身体に教え込むわ。最後まで、ね」

「や、やめろ、こんな、中出し♡されたら、あう、あっ♡んん♡やだ、だ、だすなぁっ♡」

打ちひしがれる彼に構わず、彼の奥深くに、腰を深く沈ませ白濁を注ぎ込む。

「だすなぁ…… う、ああ…… ♡」

ベッドで首輪で繋がれ、強制的に四つん這い状態にさせられている彼。もはや上半身はマットに沈み込み、かろうじてお尻を突きだしている状態だ。

突き出された臀部は、数多の平手によって真っ赤に腫れていた。彼の尻尾が腫れた箇所をかすめる度に、ビクビクと腰が震える。しばらくはまともに椅子に座れないだろう。

赤く染まった尻の中心、先ほどまで私の肉槍を咥え込んでいた彼の後孔は、ぽっかりとあき、白く粘ついた体液を漏らしていた。その白濁液は彼の太ももを伝い、シー

ツを濡らしている。シーツは彼のものか私のものか分からない体液でぐちょぐちょになっていた。

「わる、かった、から、俺が、悪かった、から……」

うわ言のように謝罪を繰り返す彼。

「反省した？もう勝手に部屋入らない?」

「反省した、はいらない、から」

「それならいいわ。ほら、痛かったでしょう?おいで、手当てしてあげる」

「あ、あうぅぅ」

腰が抜けてしまったのか、這々の体でずり、ずり、と身を寄せる彼。

いつもは強がりで生意気な態度をとる彼も、さすがにこの仕置きには堪えたのか、涙を零しながら抱きつき、謝罪を繰り返している。

「わるかった、も、しない、ゆるし、てくれ」

「うんうん、私こそたくさん痛くしてごめんね。ちゃん

と謝れて偉いね、いい子いい子」

ベッドの上で、向かい合うように抱きかかえ、彼のお尻に手を伸ばす。

空間転移で軟膏を取り寄せ、赤く腫れてしまった彼のお尻にそっと塗り拡げる。腫れたお尻をあまり刺激しないよう、優しく、慎重に手当てする。

「んう……あ、う、うぅ……♡」

「これに懲りたらもう勝手に部屋に入らないこと。何度も言ったけど、あそこには危険な薬品だってたくさんあるの。私だって、あなたを傷つけたくないんだから。分かった?」

「あ♡ああ……分かった、分かった、から..... もうしない、しない」

――夜。

私と彼はいつも同じベッドで寝ている。

というか、一応彼の私室も用意しているのだが、睦み合うには私の部屋のほうが都合がいいため、彼のベッドは置物と化しているのだ。

彼もなんだかんだ文句を言いながら、私の部屋に毎晩訪れる。

とはいえ、昼間のおしりペンペンに堪えて、さすがに今晩は別々に寝ることになりそうだ。

久しぶりの１人寝に気分が落ちながらも私室のドアを開け、目を見張る。

私の予想に反して、彼は私の部屋のベッドのうえでちょこんと待機していたのだ。

昼間のことがあって、落ち着かないのか、枕をぎゅっと抱きしめて、気まずそうに視線を伏せている。..... それ、私の枕なんだけどな。

獣人の彼からすると、私の所有物には私の匂いがして安心するのかもしれない。推測でしかないが。

「な、なんだよ……そんなにじっと見て」

「いや、まさかこの部屋の方で寝るとは思わなくて」

言いながら、ベッドに腰掛ける。彼との距離が縮まり、彼がビクッと震えた。

「べ、別にお前と寝たいとかじゃ、ないし。こっちのベッドの方が質が良いから、仕方なくってやつなんだからなっ！」

……ちなみにベッドは同じものを使っている。

昼間、あんなにお仕置きされたのに、彼の憎まれ口はもう復活したようだ。口ぶりだけだと図太いように感じるが、耳や尻尾が下がり、抱えられた枕が力が入っているのかしわくちゃになっている。

「今日は、その、シない、のか?」

おずおず、といった様子でたずねる彼。

いつもなら、ベッドで待機してくれる＝えっち OK とみなし、問答無用で彼を押し倒すところだ。しかし、さすがに今日は控えたほうが良いかもしれない。

「ん？ああ、今日はやめとくわ。お尻、いっぱい叩いちゃったから。今日は添い寝だけにしましょうか」

「..... はっ、性欲バカのお前がそんな気遣いできるなんて驚きだぜ。じゃ、じゃあ俺は寝るからなっ！」

彼は私の枕を抱きかかえながら、背をむけて眠りについた。

おそらくシワまみれになって返されるだろう枕カバーに思いを馳せる。
予備のシーツを丸めて、簡易的な枕を作り、私は彼のそばに横たわる。

おやすみのキスのつもりで、背を向けた彼の首筋に軽くキスを落とす。

「それじゃ、おやすみ」

「ん..... ああ」

気まずそうに顔を背ける彼の瞳に、情欲の熱が宿っていることに、私は知る由もなかった。